



音の光

北田
康広



音の光

「わたしは世の光である。わたしに従う者は
暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」
(ヨハネによる福音第八章一二節)

目次

一、失明	1
二・医療ミス	3
三、父と母	5
四、盲学校	7
五、音楽	10
六、転機	12
七、上京	15
八、音楽大学	17
九、結婚	21
十、神学校	24
十一、コンサート	26
十二、ノーマライゼーション	31

一・失明

「パシーン！」

電気のヒューズがとんだ、まさにそんな感じだった。忘れられない、失明した瞬間・・・。

私は、一九六五年六月二十八日十八時十五分、徳島県阿南市の個人病院で生まれた。母親は当時、身重な身体にも拘らず、バイクを乗り回していた。田んぼの畦道、デコボコの道でガタンツ、と飛び上がった瞬間、お腹に激痛が走った。そのまま急いで病院に駆け込み、緊急入院・・・。

予定日より二ヶ月も早かった。一六〇〇g、未熟児だった。保育器に入れられた。医者は母親に言った。「今夜もつかどうか・・・。あなたはまだ若い。まだ産める。諦めなさい。」冷酷な宣告だった。しかし、母親はそう簡単に諦められるわけがない。ミルクを脱脂綿に含ませ、中腰になったまま、無我夢中で与え続けた。それしかできることが

無かった。ただ無心に祈りながら・・・。

そして朝を迎えた。奇跡的に峠を越えた。母親の必死の祈りがきかれたのか？医者も驚いた。この世に奇跡はある。しかし、それで終わらなかつた。そのまま保育器に二ヶ月間入れられ、酸素吸入された私の目は、酸素濃度過多のため、弱視になっていた。当時の徳島の片田舎の病院では、未熟児網膜症の治療方法はなかつた。同じ頃、都会では医学が進んでいて、未熟児網膜症でも、レーザー治療を行って視力が回復し、不自由なく過ごしている人もいる。実際そんな女性に出会ってショックを受けたことがある。

二、医療ミス

五歳の頃は、少しばかり感じる光を頼りに、絵を描いたり、自転車に乗って田んぼやドブに落ちたりと、どこにでもいる活発な少年だった。ある日、よく効く薬があると耳にした母は、すぐるような思いでその病院に私を連れて行った。そして、とてつもなく痛い注射を打たれた。しかもその効果は抜群だった。パッと目の前が開け、世の中が急に明るくなった感じだった。それまで見えなかった虫などがよく見えるようになったのを覚えている。週に一回、注射を打ち、視力が蘇った。しかし、一か月後、五回目の注射をしたときだった。その瞬間、「パシーン！」という不気味な音が脳内に響き渡った。めいっばいに張りつめた、なけなしの網膜が切れてしまったのだ。痛みはなかった。そして・・・。まったく見えなくなってしまった。今考えると、当時で一回数万円もする注射で、保険も効かなかったから、正規の薬ではなかったのかもしれない。この事件は、父親と担当医の間で内密に話し合いがなされ、不問に付された。

怪しい注射と、酸素の過剰投与というダブルパンチを受けた幼児は、もはや立ち直れ

ないかに見えた。



三・父と母

しかし更に追い打ちは続く。さすがに両親は慌てふためいた。東京や京都の大病院に行つて医者に懇願したが、完全に網膜が剥離しており、もう手の施しようがないと言われた。次第に、父は息子の失明は諦め、一攫千金を狙う金の亡者となつていった。昭和四十年代半ば、高度経済成長の流れに乗り、一匹数百万円の錦鯉を養殖して成功を収めた。息子のことはそつちのけで、金儲けに奔走していった。

一方、母は、現実を受け入れがたく、失明した幼い息子の行く末を案じて慌てた。割れた風船が修復不可能なように、どうあがいたところで、一度失われた視力は取り戻せない。そんなことは分かっている。だが、それでもなお、いや、それだからこそ、何とかしたい。きつと奇跡が起こるはずだ……。そう信じる母は、次第に宗教にのめり込んでいった。医者から見放された以上、そうするほかに頼るものがなかった。母は、父が儲けたお金を持ち出し、「あそこに行けば治る」「これが効くかもしれない」と、言われるがまま、お布施を持つていったが、人の弱みにつけこむデタラメな宗教ばかりだ

った。線香の匂いがたちこめ、何やら怪しげな雰囲気場所に連れられて行き、お菓子を与えられて待っているように言われたことを今も覚えている。

こうして、対照的な両親は、いさかいが絶えなくなっていた。凄惨な夫婦喧嘩が毎日のように続いていた。暴力をふるう父が恐ろしかった。とぼつちりが自分に飛んではないよう、いつも怯えて部屋の間や押し入れに隠れていた。心が休まることはなかった。父だけが一方的に悪いのではないとは分かってても、鬼のように怖かった。今思えば、誰か仲裁に入ってくれる人はいなかったのか、と悔やまれるが、田んぼの中の一軒屋で起こる喧嘩は、誰にも聞こえていなかったらしい。



四・盲学校

小学校は、徳島県に一枚しかない、徳島県立盲学校に入ることになった。その頃、“統合教育”という言葉さえ知らない状況の中で、当然のごとく盲学校に入学することになった。しかし、家から学校には通うことができず、寮に入るようになった。その頃の寮は、朝から起床のブザーが鳴り、点呼、体操、掃除、食事、登校と、学習時間も自由時間も寝る時間も、すべてブザーで管理されていた。それを破ると体罰が待っていた。部屋はカーテンも無く、透明ガラスで、外から丸見えの状態だった。電話も一台しかなくて、先生の前でかけなければならなかった。お菓子も持ち込めない。食べ物と言えば、不味い給食しかなかった。とにかく、食べ盛りの頃はいつもお腹を空かせていた。そんな牢獄のような厳しい寮生活も辛かったが、週末は実家に帰らなければならず、それと同じように辛かった。家の中はいつも修羅場だった。夫婦喧嘩が絶えなかった。笑い声はまったくなかった。一家団欒など皆無だった。あるのは飛び交う怒号と恐怖ばかり。もはや家に居場所はなかった。

そして十歳になったとき、とうとう母が無一文でたたき出されてしまった。

「お母ちゃん、いつ帰ってくるんや。」

泣き叫んだのを今でも覚えていいる。やり場のない怒りと虚脱感に襲われた。さらにショックだったのは、離婚直後、すぐに二番目の母親がやってきたことだった。継母は冷たかった。辛く当たられ、いびられた。食事を抜かれたこともあった。母がいなくなつて精神的に追い詰められていたところへ、更に追い討ちをかけられたようだった。

「お前の母ちゃん、どこ行つたんや？代わつたんか？」

盲学校でもイジメられた。悲しくて悔しくて、涙がこぼれ落ちた。甘えたい盛りに、“家庭”というものを感じる事がなかった。話したいときにかげがえのない実母がいなくて、この心には耐え難い苦しみだった。

私たち人間には、周りに認めてもらいたい、自分の思いを聞いてほしい、といった欲求があるものなのに、心身共に成長する多感な時期に、“家族の愛情”がこつそりと抜け落ちてしまった。まさにそんな感じだった。今、家族愛の希薄が問われているが、誰も

一人では生きられないにも拘らず、簡単に絆を壊してしまうという現実には矛盾を感じる。
そこに、深い人間の愚かさを覚える。



五・音楽

小学生の頃、ただひとつ、心に安らぎをもたらしてくれたものがあつた。それは、楽器だつた。生まれつき音感は備わつていたのかもしれない。失明した頃、音の出るものは何でも楽器にしていた。卵切り器で「さくら」を弾いていたこともある。盲学校では、音楽室のギター、アコーディオン、ドラム、ピアノ、笛、ベースと、手当たり次第に何でも手を出して、自力で音を出していた。音が出るものであれば何でも良かった。愛情に飢えていた心は、音楽に“愛”を感じていたのかもしれない。音の世界に“心の平安”を求めていたのかもしれない。

ピアノを中心に、ひたすら音楽にのめり込んでいった。それだけが生きる糧になつていった。中学生になつた時、「難しい世界ではあるけれど、将来は音楽の道に進みたい」そんな希望を持つようになっていた。暗く閉ざされた世界しか知らなかつた心に、初めて明るい光が差し込んできた感覚だつた。文化祭の時は、課題曲のアレンジや、各パートの編成も、音楽の先生に代わつて全部やつていた。とにかく楽しくて仕様がなかつた。

あまりに要求が多くなりすぎて、同級生からは文句も出ていたのだが、お構いなしに、時の経つのも忘れて取り組んでいた。

しかし、学校では鍼灸の勉強が優先され、「音楽を志すなど論外だ」と相手にすらしてくれなかった。障害を持った人が音楽で自立し、実益を得るのは簡単ではない。「何か手に職をつけさせなければ」、というのが学校側の論理だった。頭ごなしに否定され、志望する音楽へのあこがれも簡単に挫かれ、すべてが閉ざされたように思われた。たった一つの望みが消え、自分はいてもいなくてもいいんじゃないか、とさえ思うようになっていった。悲観的な考えに覆われ、孤独のどん底にいた感じだった。思春期の心は、どうしようもない虚しさに打ちのめされそうだった。



六 転機

高校生になった時だった。転任してきた吉村孝雄先生との出会いが、それまでの暗く閉ざされた心を一八〇度転換し、その後の人生に多大な影響を与えてくれた。吉村先生は、ひとりの人間として対等に接し、語りかけ、音楽の道へ進むことを応援してください。った。

『視覚障害者だからといって、夢をあきらめてはいけません。できないと決めつけてもいけない。それでは後で後悔してしまう。誰が何と言ってもやってみなさい！』
吉村先生のこの言葉が、どれ程まで深く心に沁み入り、人生を切り開く力になったことか……。今でも心の奥底にその思いが息づいている。

吉村先生によつて、初めて人に認めてもらい、自分は自分のままでいいんだ、自分に与えられたものを伸ばすのが素晴らしいことだ、と確信できるようになった。劣等感を抱き、内向的だった性格も、前向きに変わった。自己肯定が自信を生んだ。この経験は、後の演奏活動にも大きな影響を及ぼしてくれた。

ピアノも、独学ながら無我夢中で練習した。そして、東京のコンクールに出ることを決め、第三十一回ヘレン・ケラー記念音楽コンクールで第一位を受賞した。初めて東京に出てきて、徳島とは全く違う都会の雰囲気を感じたことも嬉しかったが、何より、音楽で人に認めてもらえたことが嬉しかった。周囲の、自分に対する態度も変わってきた。はじめも減った。教師も少しは認めてくれた。だが、按摩の勉強は続いていた。

それから、音楽以外の事にも、積極低に取り組む勇気が湧いてきた。今まで苦手としていたスポーツにも興味を持ち始めた。一人で黙々と体力づくりに励み、スポーツ大会にも出られるだけの力を身につけ、全国身障者スポーツ大会の出場権を得た。これを機に、はじめもなくなった。

第十八回全国身障者スポーツ大会は島根県松江市で行われた。今まで盲学校の狭い世界しか知らなかった少年にとって、外泊できること自体が夢心地だったが、他の障害をもつ生徒との出会いも新鮮で、多くの友達ができたことは大きな喜びだった。すべてが心躍る状況の中で、ほぼいつも通りの力が発揮出来、“ソフトボール投げ”と“立ち幅跳び”の二種目で金メダルを獲得した。しかも、ソフトボール投げで、九年ぶりに大会新

記録を更新した。表彰式では、今の両陛下からお声をかけていただき、緊張してカチコチになってしまったことを覚えている。そして、後夜祭のゲストは、坂本九だった。夜空にこだまする、あの独特な歌声が、なぜか深く印象に残っている。

勉強も頑張った。今までは、何もする気力が湧かず、通信簿は一と二ばかりで、まるで行進曲のようだったのに、吉村先生に放課後教えを受け、どの科目も、中学生レベルのことからやり直して、理解できるようになっていった。そして、受験に備え、高校三年生の冬には、先生の家泊まりこんで特訓を受けた。先生の家は山奥にあり、暖房も無いような寒い状況であったにもかかわらず、ただひたすら、無我夢中で先生から学んでいた。食事も寝起きも共にし、先生のお子さんと一緒に風呂に入り、家族の温もりを感じていたのかもしれない。ずっとこのままでいたい……。そんなことすら思っていた。

「受験に失敗したら私が責任をとる。」

吉村先生はそこまで真剣に考えてくださり、面倒を見てくださった。まだ三十代半ばの若さでありながら、ここまで責任感のある先生にいまだかつて出会ったことが無い。

七. 上京

吉村先生の猛特訓のお陰で、東京の筑波大学附属盲学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）の音楽科専攻科に入学できた。徳島県立盲学校創立以来、音楽学校に進学した最初の生徒となった。ピアノ漬けの生活が始まった。ひたすら音楽のことだけを考え、毎日猛烈に練習に励んだ。和声や楽理の基礎も、音大レベルまで叩き込まれた。大学に入っても苦勞しないように、との先生の計らいからだ。お陰で、大学では楽に授業についていくことができた。音楽の虫になってはいたが、全く苦にはならなかった。むしろ充実感を感じていた二年間だった。そこでは、独学で弾いていたピアノを、基礎から徹底的に叩き直してくれた恩師との出会いもあった。足立勤一先生（現・群馬医療福祉大学教授）は、本当に親身な指導をして下さった。

ここでも寮生活ではあったが、徳島時代とは正反対の生活だった。自由奔放、何をやるのもOK。すべて自己責任で行えば良いという。とにかく初めの頃は食べまくった。自由に買って食べても良いなどという夢のような現実のお陰で、体重が一気に10kgも

増えた。買い物も自由。電車に乗って出掛けるのも自由。社会的に参加することも自由。男女交際も自由。全て責任を伴う“自由”が与えられた。と同時に、自分が視覚障害者であるということ、外部と接触することによって逆に思い知らされた。徳島での過保護な温室育ちの時には考えたこともなかった、厳しい現実を叩きつけられたようだった。また、同級生は、全国各地から集まった優秀な盲学生ばかりだった。どんなに遊びまわっているような生徒でも、不思議とテストの点数は良かった。年代には、東大や京大などの一流大学に現役で進学する者もいたほどである。皆それぞれ個性的で、かなり刺激になった。



八・音楽大学

深い苦しみを経験したとき、立ち直れないような痛みを味わったとき、言葉や慰めは無効であることが多い。しかし、同じような体験をした仲間がいるだけで、癒されることがある。それが勇気となる場合がある。

筑波大学附属盲学校を卒業し、点字で受験できる武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科有鍵楽器専攻ピアノ専修を受験した。未だに点字受験を認めていない大学は多々あるが、東京芸術大学や桐朋学園大学などもその部類である。まあ、自分にはそのレベルは所詮無理だったかもしれないが、「諦めてはいけない。できないと決めつけてもいけない。やってみなければ分からない」・・・ではないのか？しかし、堅く閉ざされた門戸は開かれることなく、挑戦することすらできなかった。

だからこそ、余計に練習に力が入った。毎日八時間は弾き続けた。猛練習の成果は出た。受験当日、課題曲を弾き終えた直後、審査員の一人が声を掛けてきた。握手を求めてきて、とても良かったと褒めてくださった。受験生に握手を求めるなど、考えられな

いことだった。後で聞いた話だが、入学時の成績はトップだったらしい。これは信じられなかった。何故なら、徳島では音楽室や体育館のピアノで、うるさいと邪魔者扱いされながら、殆ど自己流で弾いていただけで、筑波大学附属盲学校に来て初めて、基礎から叩き直されたような、言わば突貫工事のような状態だったからだ。幼い頃から大学の先生にレッスンを受けているような正統派の学生とは、比較にならないと思っていた。それでも、二年間の努力が報われた喜びは大きかった。

当時受験生の中にもうひとり、点字受験生がいた。『さとうきび畑』でブレイクした、十三歳年長の新垣勉さんだった。視覚障害、複雑な家庭環境、音楽、キリスト教。人生の共通点がいくつもあり、すぐに意気投合した。しかし、点字受験に慣れていない新垣さんは不合格になってしまった。それからの一年間、彼の家に何度も泊まっては、点字楽譜の勉強を手伝ってあげた。その代わりに、音楽の基礎から発声から、ありとあらゆることを教えてもらった。新垣さんはすぐ、私に歌の才能があることを認め、もっと伸ばすことを勧めてくれた。しかし、その当時はまだその意味がよく分かっていなかった。

好きで歌ってはいしたが、ピアニストになることしか考えていなかったからだ。今でも、あの頃教えてもらった発声法をよく行っている。新垣さんの歌いまわしなどを参考にすることも多い。新垣さんは、翌年トップで合格した。いつか新垣さんとジョイントコンサートをやってみたい、というのが今も叶わぬ夢だ。

音大三年生の六月。その日は雨が降っていた。いつものように、バスで学校に向かった。音大前のバス停で降り、雨に濡れながら、学校までの三〇〇mを歩いていたら、急に雨が上がったかと思つた瞬間、傘に入れてもらったことに気がついた。それが、妻・陽子との初めての出会いだった。視覚障害者は、単独歩行をする時、雨が降つていようが傘を差さないことが多い。何故なら、傘に当たる雨音が邪魔になるからだ。いつも音に気を付けて危険を避けながら歩いているのに、傘を差したら何も聴こえなくなってしまう。ましてや、片手は白杖を持っているのだから、両手がふさがってしまう。そんな訳で、その日も濡れながら歩いていたので、同じピアノ科だというのに、一度も話をしたこともなかった。少人数の盲学校とは違い、比較にならないほどの大人数が一緒

に勉強する環境においては無理もない。聞けば、選択科目の時は、一緒に授業を受けていたらしい。だが、いつも一番前の席に座って、先生の講義を録音していたから、常に後方の席に座る彼女に声をかけられることはなかった。それからしばらく全く会うこともなかったが、偶然、またバス停で一緒になった。聞けば、二〇〇mしか離れていないアパートに住んでいると言う。CDの話題になり、お互い持っていないCDを貸し借りしよう、ということになった。僕は、ホロヴィッツのCDを借り、彼女は・・・忘れた。数枚しか持っていなかったようだから、かなり貸してあげただけは覚えている。それから付き合いが始まり、授業と一緒に参加したり、練習に立ち会ったりしていた。

九・結婚

大学を卒業してすぐ結婚することになった。仕事も決まっていけないのに、早々に入籍だけはすませた。故郷の徳島には戻らなかった。父親と暮らすことは考えられず、大学を卒業してすぐ、実母の性に変えた。そして、とりあえず、所沢にある国立リハビリセンターに三年間通い、鍼灸の勉強をすることにした。将来、治療院で働くことは全く考えていなかったが、とにかく、何か保障となるものが欲しかった。

そしてその頃、徳島から実母が上京してきた。父親との離婚後、怪しげな宗教にどっぷり浸かって、再婚と離婚を繰り返していたようだが、美容室とスナックを経営し、昼も夜も働き詰めでお金を貯め、上京する時を見計らっていたそうだ。音大を卒業するのを待ち構えていて、夜逃げ同然のようにやってきた。そして、当時入信していた宗教のお坊さんに唆されて、手っ取り早くスナックを開いた。

音大を卒業した一九九〇年十一月四日、東京で念願のデビューリサイタルを開催した。音楽の友ホールでのピアノリサイタルだった。友人知人ばかりの前で、緊張し過ぎて胃

が痛くなつたことだけはよく覚えてゐる。良くも悪くも無事大役を果たしたという安堵感だけに包まれ、母の店で打ち上げをした。

ようやくスタートラインに立ち、これからどうしようか、と思つていたとき、母と妻は折り合いが悪かつた。嫁姑の関係はどこも同じかもしれないが、ご他聞に漏れず、かなり険悪な状態だつた。そして、ついに妻の方が切れてしまつた。離婚すると言ひ始めたのだ。二人の間に挟まれた身としてはどうにもしようがなく、とにかく胃の痛くなる日々が続いた。夜遅くまで真剣に語り合つた。その頃二人で、三浦綾子の著書や、カウレンセリング関係の本をいろいろと読んだ。恩師の吉村先生が非常に熱心なクリスチャンであつた影響もあつて、学生時代にも教会に通つていた時期もあり、自然とクリス教的な考えを持つていた。妻も子供の頃、日曜学校に行つて聖書を読み、讚美歌を歌つていたことがあつたので、クリスト教には何の抵抗もなかつた。次第に彼女の心も落ち着きを取り戻し、二人で所沢市内の教会巡りを始めた。そして何件目かに訪ねた教会が気に入り、続けて出席するようになった。そして、その教会でクリストの救いを受け入れる決心をし、共にバプテスマ（洗礼）を受け、教会生活が始まつた。

ほどなくして、母も教会に行くようになった。もともと宗教好きで、異端のキリスト教会にも行っていたことがある母には、別段抵抗もなかった。そんなある日、思い切つて、家の神棚と仏壇を、ある牧師に依頼して壊してもらった。翌日、毎月一回必ずお経を上げに来ていたお坊さんが、神棚が無いのに気付き、黙って帰っていった。察したのか、以来一度も訪ねてこなくなつた。元はと言えば、このいんちき臭いデタラメな坊さんが母を混乱させていたのだ。上京してすぐスナックを開業せよとか、あの嫁は良くないから離婚させろとか、新垣さんとは付き合うとか、何でも無邪気に信じこむ母を言いくるめて操っていた。そして毎月一回訪れる度にお布施を巻き上げ、高いステークを食べ、カラオケを歌つて、少しお経を上げて帰るといふ有様だった。だから、仏壇や神棚を壊してもらつた時は、これで悪を断ち切れたという安堵感で気分爽快だった。母も徐々に変わっていった。

十・神学校

徳島にいた頃、吉村先生から、キリスト教の話をかなり聞かされていた。キリスト教の精神に基づいて病院や福祉施設が始まったこと。音楽はキリスト教にとっては欠かすことのできない重要なもので、偉大な作曲家の多くが、宗教曲を最後の作品としたことなど、他の先生からは聞かれない、多くのことを教えられていた。やがて、もつとキリスト教のことを勉強したい、神学校に行きたいという思いが強くなり、所属する日本バプテスト連盟の神学校に通い始めた。中目黒の学校まで、電車とバスを乗り継いで行かなければならなかった。社会人対象の学校であるため、夜学だった。初めのうちは妻に付き添ってもらい、授業が終わるまで待つてもらっていた。三年目にもなると、一人で通えるようになった。幾つかの難関を通り越せば、何とかあった。最大の難関は、渋谷駅で山手線を降りて、人ごみを掻き分けて、目的のバス停に辿り着くまでだった。目的とするバス停の目印が無い。とにかく、目的の改札を探し、出たら左方向に三〇歩行き、さらに左に曲がって、二〇歩少し斜めに行った所。それを何度も何度も練習した。しか

し、待っている人の列の最後尾が分からない。そんな時、一番前に案内してくれる人もいて、有難かった。

ある時、バスの中で、悪霊に取り付かれたような人に突然声を掛けられたことがあった。こっちは一人で緊張しながらバスに乗っているというのに、心を試すようなことを言ってくる。しかし、意外にも心は平安に満たされていたから、愚かな言葉に惑わされることはなかった。いつも神様が共にいて守ってくださっていたからだ、感謝に耐えない。ともかくにも、片道二時間の道のりを四年間通い通し、無事卒業することができた。今ではとてもその勇氣はないが、当時とはかく心が燃えていて、恐怖心はなかった。



十一・コンサート

神学校に通いながら、自主企画のリサイタルを行ったり、学校や福祉関係から依頼を受けてコンサートを行っていたが、やがて、キリスト教会でチャペルコンサートを行うようになっていった。それは、新垣さんの影響も大きかった。当時、新垣さんも賛美伝道者として、全国の教会でチャペルコンサートを開いていた。何度か聴きに行ったこともある。神学校を卒業してから、自分も新垣さんと同じように、賛美伝道者としてチャペルコンサートがしたい！という想いが募り、点字雑誌にチラシを出したところ、偶然それを手にした吉村先生が、早速コンサートを企画してくださった。初のチャペルコンサートは、奇しくも故郷の徳島で行われた。

チャペルコンサートの依頼が増え、いくつものハードルを越えながら、年間五十回位行うまでになっていた頃、一人のご婦人が、こっそり、あるレコード会社に売り込んでくれた。そしてコンサート会場でプロデューサーと会った。その人こそ、新垣さんのCD「さとうきび畑」を出したT氏だった。コンサートを聴いてくれたT氏は、早速CD

制作に取り掛かってくれた。新垣さんが他のレコード会社に移籍し、新人を探していた時だけに、タイミングが良かったようだ。

初のレコーディング。何も分からず、ただただ緊張するばかり。実力を発揮する間もなく、時間ばかりが過ぎていく。おまけに、その様子をテレビカメラが収録している。追い詰められそうになりながら何とか終えた。こうしてデビューアルバム『ことりがらを』が世に出た。満足のいく出来栄ではなかったが、こればかりはいつまで経っても、完璧にいくことはないだろうから、どうしようもないことかもしれない。とにかく、出来る限りの力を出して踏ん張った。今まで幾つもの試練を越えてきた。試練も、それを乗り越えるだけの力を与えてくださるのも神様だ。今回も、すべてを良しとしてください。さる神様に委ねるしかなかった。

二〇〇四年十一月三日、初のCD「ことりがらを」が全国発売された。今まで何度もCDはないのかと言われていたのに、躊躇して作らずじまいだったが、やっとCDを作ることができ、しかもメジャーデビューという思いがけない運びとなった。そして、そのレコーディング風景を含め、「奇跡体験！アンビリバボー」というテレビ番組で“全

盲のピアニスト”と題して全国放映されると、たちまち全国からコンサートの依頼をいただくようになった。テレビの影響力の大きさを知らされた。

テレビ放映後、キリスト教会以外に、人権関係、学校や福祉関係のコンサートの依頼も増えた。

「北田康広トークコンサート」

「心の瞳コンサート」心の目、見えていますか？」

という演題で話すことが多い。コンサートの中で、メッセージを語る。ピアノと歌の演奏を交えながら、いろんなトークを織り交ぜる。生い立ちも話す。聴いてくださる、お一人お一人の心に届くことを願いながら。コンサートでの出逢いを大切にしたい、何か一つでも心に残る言葉があればいい……。そんな思いを胸に語り続けている。

『自分に自信を持って生きてほしい。自分は自分のままでいいのです。他人と比較すると劣等感を抱いてしまいます。ありのままの自分を受け入れ、ありのままの自分を生きとみる。人を羨むのではなく、自分らしい輝きを大切にするとき、そこに光が差ししてく

るはずです』

『悲しいとき、つらいとき、私は思いました。せめて一分だけでいい。私に視力をいただけるとしたら、夜空に輝く満天の星を仰いでみたいと。それはかなわない夢でした。それでも、私は絶望しません』

『ナンバーワンではなく、世界でたったひとつの存在、オンリーワン”を目指すのです。小さくてもいい、自分にしかできないことにベストを尽くす。そうすれば必ず道は開けてきます。あなたは、この世にたったひとりしかいない存在なのです。障害があっても、どんなに苦しくても、自分の代わりはいないのだから・・・』

『障害者として生きるとは、体験する人にしか分からない苦しみであるけれども、それは、あなたなら、その試練に耐えられると神様が判断して与えてくださった、名誉だと思おうのです。』



十二 ノーマライゼーション

健常者中心にできている世の中では、私たち視覚障害者は、身体的に弱者であり、人の手を借りなければ生きていけない存在であることは確かである。しかし、人より多くの弱さを担っているからこそ、逆に多くの力を得て、他の人々に勇気と力を与えていることもあるのではないかと思う。ツルツルの氷の上はそのままでは歩けないけれど、何かひつかかるものがあれば歩ける。それと同じで、その“ひつかかる”ものが、生きる上では精神的に必要なのではないかと思う。障害や苦しみによって磨かれることで、暗闇の中においてもだんだん光が増していき、そのうちに光が闇に打ち勝つことになる。

キリスト教は、人と比べるのではなく、障害も全て含めて、それが「自分らしさ」なのだと教えてくれた。唯一の存在として生きることを大切にす。その前向きな姿勢が多くの人に受け入れられているのだらうと思う。弱さを弱さと感じないで、個性として受け入れるということなのだと思う。

人は誰もが神様から一通りのものを与えられているにも拘らず、それに気付いていなかったり、活かしきれていないだけなのではないか。自分でも気がついていない能力があるのに……。神様が与えてくださったものを、まずは素直に受け取る。たとえそれが障害であったとしても。障害があるがゆえに、魂のレベルではより神様に近いところにあるのだという考え方、それが大事なことだと思う。

目が見えないという運命を呪うのではなく、それを与えられたことに、まず、自分がそれを担うだけの人間であるからこそ選ばれたのだという感謝を抱き、そこに神様のご計画を見出し、自分に与えられた使命を果たすことを考えるべきではないだろうか。

「盲人は不便ではあっても不幸ではない」と言った先人がいるが、私にはそう言いきれるかどうか自信がない。しかし、不便さや不自由さは、周りのひとの配慮によっていくらか軽減できるものだし、障害が因果や因縁とは全く無関係のものであることを理解してもらうためにも、そして、世の中の「障害は不幸だ」という考えを変えていくためにも、「障害は不幸ではない」と言うしかないと思っっている。小さな声でも、そう言い続

けなければ、間違った福祉理解が進んでしまうだろうから。

障害に含まれる様々なことを理解する上で、「ノーマライゼーション」という考えがある。「共に生きる」という概念だ。現実には、障害者は「弱者」であり、出すぎたことをしてはいけないとする風潮が、まだまだ強いように思えるが・・・。

ボランティア活動も活発になってきているが、まだ「やってあげている」という上から目線を感じる。そこには、「共に」という気持ちではなく、「為に」という考えがあるからなのではないか・・・？ 病気になると人の親切に対して敏感になると言うが、障害をもつ人間には、常にその感覚があるように思える。

しかし、障害者も精神性の高い人ばかりではない。人間として同じように妬みなどのマイナス面を抱えているのが現状だ。マスコミによって、元気で頑張っている人を特別視したり、逆に過小評価したりすることがよく見受けられる。それらは、健常者が納得できる「落とし所」へ持っていくというパターン化した報道であるようにさえ感じる。そうになると、障害者は「しんどい」とは言いづらくなってくる。だからこそ、「盲人のく

せに」と言われようが、決して頑張る障害者にはならないぞ、と思っっている。常に、人に對して「ありがとうございます」と言い続けなければならぬような、卑屈な立場でいることは嫌だし、逆に、人を使うくらい気持ちで生きていきたいと思うからだ。

最近、障害というものは何も特別なことではなくて、「一個性」だという考え方に変わり、障害者を特別枠に入れないようにしている風潮を感じるが、それもまた、極端なご都合主義的考えに思えてくる。どっちに転んでも不自然で、本当の理解は生まれていないことを感ぜずにはいられない。だからこそ、私は音楽を通して、コンサート活動を通して、問題提起し、自分の考えを語り続けていかなければならないのだと思っっている。与えられた“音楽”と“障害”という、二つの神様からの贈り物を感じ謝して受け止め、自分にしかできない、自分に与えられた使命を全うしていきたいと願っっている。

これまでの歩みが激しいまでに険しかったからこそ、音楽のみに取り組んでも出せないような、深い音色がにじみ出ているのかもしれない。私の演奏を聴いて何かを感じてくださるとしたら、きつとそこに、苦しみを抱えている者にしか出せないような、音の響きや粘りといったものがあるからだと思う。また、音楽は、音という光を見るものだ

とも言えるのではないか。だからこそ、視力がなくても出来るのだと思う。それが人生における“希望”というものでもあるのではないだろうか。

ピアノで人生のメッセージを歌い、“声”という楽器を用いて“希望”を奏でる。その心の中には、光をとらえる“目”があるから。

あなたは“心の目”で見えていますか？



北田康広

筑波大学附属視覚特別支援学校（附属盲学校）専攻科音楽科卒。

武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科有鍵楽器専修ピアノ専攻卒。

東京バプテテスト神学校神学科卒。

ピアノを足立勤一、若尾輝子、マックス・マルティン・シユタインの諸氏に師事。

歌を人見共、新垣勉、中山文雄の諸氏に師事。

第三十一回ヘレン・ケラー記念音楽コンクール第一位受賞。

第十八回全国身障者スポーツ大会陸上競技二種目で金メダル獲得（投擲競技で大会新）。

フジテレビ系列「奇跡体験！アンビリバボー」に出演。

二〇〇四年十一月『ことりがそらを』リリース。

二〇〇六年八月『心の瞳』リリース。

二〇〇九年八月『藍色の旋律』リリース。

二〇一二年三月『讚美歌集』『人生の海の嵐に』リリース。

二〇一六年十一月『見上げてごらん夜の星を』リリース

二〇一六年十一月『旅立ちの日に』リリース

音の光

2016年11月発行

mindseye association

